

春燈

10 月号

October 2010



主宰の句

安立公彦

梅干すやわが血に残る農の筋

昭和より永き戦後や蟬しぐれ

芥川全集曝書の頁を繰りゐたり

持ち古りしペンの辻りや夜の秋

小諸なる古城そぞろに星涼し



成瀬櫻桃子の句

父子の情断ち切りがたし棹なす雁

『風色』昭和四十八年

雁のわたりは、私の幼い頃は秋になればさして珍しい景ではなかった。先頭の雁は父、殿は母だと誰かが言った。全員を見渡せて、猛禽に狙われぬような形が棹であり鍵である。雁とて父親である限り家族を守る重い責任を負っているのである。父情断ちがたき念い溢れるこの句の下五、雁の棹とせず、棹なす雁と据えたことは先生の胸中察するに余りある。

片桐てい女

成瀬櫻桃子の句

明日は別れ子と手花火のこれつきり

『素心』昭和五十六年

この句は「ダウン氏症」の長女美菜子様が明日は施設に帰る前の夜、お二人で手花火をしたときのことを詠んだ句であろう。夏休みで帰って来た子と明日は、また別れてしまう。そのせつなさと、いとおしさが下五の「これつきり」の措辞によってせつせつと胸に迫る。「ダウン氏症」の子は、決して人を疑う事を知らない永遠の子どもと言われ、この句の淋しさがよけいに身に沁みる。

今井弘雄

燈下集



○ 野崎昭子

紫陽花の穂のうなづく風の道
猛獸の檻ひらひらと夏の蝶
木の瘤をさけて通りぬ蝸牛
参道に磴の続けり濃あぢさゐ
三日経て皺ふかめたり夜干梅

○ 本多遊方

炎天の菓子屋横町影溶くる (川越)
傘立の脇で蝙蝠寝てゐたり
確固たる青空のあり百日紅
烏瓜の花をたしかめ雨戸閉づ
住職の忙中閑の祭かな

○ 岡野イネ子

空缶はサクマドロップ夜の秋
子子やよく気の合つた浮き沈み
チェホフの戯曲読む夜の灯とり虫
深川や伊勢喜くぐりし夏のれん
小三治の送り太鼓は池の端

○ 森下賢一

耳の奥より鳴き出して油蟬
発音はアメリカ力仕込み香水も
さながらに猫は端居の専門家
竹夫人わが知る上海古りにけり
落し文また訃報かも知れぬ

○ さのれいこ

炎帝といへばカミュの異邦人

パンドラの箱を開けたる炎暑かな

音たてて記憶くづるる炎暑かな

足もとに死神すわる蚊屋の中

尻馬にのりてわめくや牛蛙

○ 武田 巨子

夏神楽川を渡つてきたりけり

けふよりは鉾立道をふさぎけり

旅の支度のはかどらず如小豆

風死すやストーンヘンジに神天降り

七夕の夜間飛行となりにけり

○ 諸岡 孝子

大いなる夫の釣果や青岬

襖みな外し放下に似たるかな

父よりも沖遠くゆく抜手の子

花南瓜添乳の海女のまだ稚な

海へ出る寺の抜道黒日傘

○ 小泉 三枝

ひやかしと踏んで昼寝の骨董屋

誰彼を祝ぎし切子のペアグラス

境内の小屋掛け沙翁夏芝居

夕菅の人待ち顔の業平寺

峰雲の音立て崩る訃なりけり

○ 宮崎 裕子

十葉や十字の挽歌満つる朝

椅子よりも花莫蔭親し書を開く

無造作に下げて売らるる竹婦人

そして誰もぬなくなりけり昼寝覚

甚平着て有耶無耶になる話かな

○ 平野 加代子

余命いくばくか知らぬ幸せ蚩舞ふ

胡蝶蘭切り戻したき夢のあり

瓜揉むや心の揺れの塩加減

カレンダーめくつて溽暑はらひけり

山襷の涼を分け行く奥多摩線

○ 田嶋 洋子

飽きもせず回る秒針夏の風邪

凌霄や処方箋持ち薬局へ

それぞれの珈琲の濃さ朝曇

まだ割れぬワイングラスや巴里祭

帯の色違へ浴衣の姉いもと

○ 菅 澤 陽 子

黄金色の艶よく描けし卓の枇杷

栄転といふ転勤や梅雨の明

鍋底に透けて仕上がる梅エキス

地球儀の島国に生れ夏の旅

日焼して立つや砂漠のピラミッド

○ 高 嶋 文 清

風呂敷の中を見たがる鴉の子

力石迂回してゆく蟻の列

よだれ掛真つ赤が暑し六地蔵

猛暑かなひたと動かぬ水の面

夏の岳人をそらさぬ面構へ

○ 石 橋 公 代

かたつむり終の住処に罅走り

嫁ぎたる子の名を付けて飼ふ金魚

氏も素性も隠す術なしサンガラス

六甲山にきらきらと雨合歡の花

『街道をゆく』に道草して曝書

○ 白 神 知 恵 子

梅雨明の風這はせつつ畳拭く

昨日よりうまき草笛下校の児

朝市の捌けて水打つ大バケツ

祭ずし嫁へ言ひつぐかくし味

蒲の穂の育ち病院跡地とよ

○ 長 谷 川 歌 子

炎帝に一步退かざる赤き服

夜昼をたがへし人の籠枕

蓮池や上野に江戸の残り風

落暉いま今日の別れの水を打つ

夜の秋叱声洩るる塾の窓

当月集

安立 公彦選



○ 片山博介

機関車の谷渡る笛雲の峰

みちのくは雲ゆたかなりラムネ噴く

お花畑あまたたび雲通り過ぎ

長旅の雨の一日や合歓の花

鮎の腸食ふや星空狭き溪

○ 矢口笑子

羽田発最終便や夏の果

峰雲や子規の青春残る町

炎帝と真向勝負鬼瓦

送迎デッキに手を振る別れサングラス

離陸せる四国上空大夕焼

○ 都丸美陽子

白日傘ころろ残して戻りけり

駅までのありふれた朝蛇の衣

蔵涼し火伏せの札を貼りかへて

風と来て風と去りゆく川蜻蛉

夕顔や音沙汰のなき人を待つ

○ 清水美子

夏蝶や音なく昼を揺らし来る

城門に仕掛あまたや女郎蜘蛛

夕涼や背筋きりりと帯姿

篝火や慈愛に満ちし鶴匠の目

あつけなき別れとなりし夏袴 (悼岩井泉樹さん)

○ 神田恵琳

青鷺の威の自づから不動池

空蟬を机上に雨月物語

日焼子に母の一声やさしかり

葛の風耀歌の山の紫影濃き

山清水提げて鎌倉夫人かな

春燈の句

安立 公彦選



浜木綿に風の在所を尋ねけり

神奈川 葦原 霞切

空蟬に語りかけぬる我があて

生くるとや人恋ふるとや蟬時雨
紙魚食むや若きゲーテの恋の章
サングラスとれば失意の顔ならむ
埠頭行く女兵士のサングラス

神奈川 宮崎 紗伎

靡校と決まりし一もと百日紅

マチュピチュは遙けしトマト瑞々し

千葉 藤原 若菜

かき氷ひとつを崩しあふふたり

裏山に瀬音ののぼる合飲の花
昼顔や墓に置かれし竹箒
到来の芭の匂ふ厨かな

東京 村上 勝正

草刈機の音途切れなし夏旺ん

炎屋や受けて立つ気の帯しめて

神奈川 浅木 ノエ

次の日を約せぬ別れ涼しかり

遠雷の遠雷のまま果てにけり
山峡へ消ゆる鉄路や夕焼空

東京 後藤真由美

厨の灯涼しく帰り待ちにけり

十四代柿右衛門展暑氣払ふ

青葡萄人恋ひそめし雨の坂

大阪 小田 明美

人待つや蟬一斉に鳴き始む

蛇の衣捨て身の恋の導火線
原爆ドームかの炎熱を語り継ぐ

余言

安立公彦

敦忌に集ふ饒舌大南風

橘 正義

昭和六十三年七月八日に亡くなられた安住敦先生の二十三回忌が、去る七月三日、祐天寺において執り行われた。「春燈」からは関東近辺の有志が参列、「春野」や「瀝」の皆さんも見え、さながら安住先生と吟行しているような思いがするのだった。

法事も二十三回忌ともなれば、むしろ清々しい気持がする。直会の席では、銘酒「鳥海山」に、作者のみならず饒舌にもなるうというもの。形の上で一つの区切りがついたという思いだっただけ。しかし参加した皆さんの心の中には、今も変わらず安住先生の温顔が揺曳していることだろう。

天上の出を待つ舞台風涼し

鷹崎由未子

七月十一日、岩井泉樹さんが亡くなった。六十九歳、演劇俳優だった。今年の春泉樹さん出演の劇場に誘われたが時間がとれなかった。次回は観に行こうと思っていたのがこういうことになり、暫し心の動揺が取れなかった。

昨年今年と続いた「久保田万太郎研究会」で、泉樹さんは中村嵐楓子さんとともに、万太郎の小説の一章を朗読した。読んでいただけでは味わえない万太郎文学が、耳に聴くことでよく理解された。言葉の強弱、間合の取り方など教わることは多かった。

九月号の投句用紙に、泉樹さんは、「病氣治療に専念の為出句は控えさせて頂きます。よろしくお願ひ申し上げます。」と書いている。しっかりとした字だった。

今月号には、泉樹さんへの悼句が多かった。作者の句はこれらの句を代表する。「天上の出を待つ舞台」が絶妙。

『櫻桃子俳句選集』灯すずし

鈴木 直允

『成瀬櫻桃子俳句選集』がめでたく上木の運びとなったことは喜ばしい。散逸した文書を探し、異同を整え、また年譜を詳細に調べることは根気の要る作業だ。さらにそれらの資料を形ある「選集」に仕上げることは、誰れにでも出来ることではない。作者は編集長として常にその方向を提示し、自らもその先頭に立つてこの大役を果した。参加する皆さんも協力を惜しまなかった。

今、この選集を灯下に見る作者。「灯すずし」に作者の万感の思いが感じられる。

瓜揉むや心の揺れの塩加減

平野加代子

虚子編『新歳時記』には、「瓜もみ」を、「瓜類を薄く刻んで塩で揉み、二杯酢又は三杯酢にした料理をいふ。」と解説してある。その他の歳時記もこれと同類だ。

この句、「心の揺れの」という作者にしか分らない言葉を入れながら、「瓜揉むや」「塩加減」という具体的な表現により、一句の中の人物像が、読み手にも理解される句となっている。「心の揺れの塩加減」が絶妙だ。

水底は隠れ場ならず浮いて来い

呉 文宗

「浮いて来い」とはまた微妙な名だ。主季語である「浮人形」の派生季語。万太郎、敦ともに「全句集」に例句はない。『櫻桃子俳句選集』に二句あるのみである。

作者は「台北俳句会」に所属する。藤原若菜の、「台北俳句事情」に紹介された種々の事柄と併せてご覧頂きたい。この句、「浮人形」に意匠があるかのような表現が、「浮いて来い」という季語をみごとに活かしている。

夏蝶や音なく昼を揺らし来る

清水 美子

今年の夏はいつになく蝶が多かった。それも黒揚羽のような大形の蝶を良く見た。黒揚羽が浮かぶように舞う姿には、ひととき暑さを忘れさせるものがある。

この句、そういう夏の午後の気分をよく表わしている。「揺らし来る」にそこはかない倦怠を感じる。

葛の風燿歌の山の紫影濃き

神田 恵琳

この「燿歌の山」は筑波山。わずか八七六メートルに過ぎないこの山を『日本百名山』に選んだことについて、著者の深田久弥はその解説を好意を以て書いている。

衆知の通り、連歌の道を「筑波の道」と言う。起源は記紀の代に遡る。車中からの眺めもいいが、田園に浮かぶ男山女山双峰の姿は、見ていてところが洗われるような和みを覚える。この山にも半世紀近く登っていない。この句、よく言葉を選んで表現している。

西といふ語呂の短き秋入日

猪腰 俊

作者は八月二日故人となる。三上程子さんから知らせを受けて一瞬呆然とした。春燈歴は浅い。言葉を交すことも無かった。しかし故人の持つ「うたごころ」には、読み手の気持を掴むものがあつた。

「西」には西方浄土の意味もある。「秋入日」に包まれゆく故人の姿が浮かぶ。悼。